様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０４１５０

研究課題名（和文）「農村社会学」成立・展開過程の再検討――戦前・戦後期を中心に――

研究課題名（英文）Reconsideration of Development Processes of Japanese Rural Sociology before and after World War II.

研究代表者
矢野　晋吾（Yano, Shngo）

青山学院大学・総合文化政策学部・教授

研究者番号：００３４４３４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、かつてない変革期を迎えている現代日本の農山漁村の実態を把握・分析することを目的としている。従来、「農村社会学」が担ったその分析だが、急激な社会構造の変化により既存の枠組みによる適応は困難となっている。
　本研究は、従来の「家・村」理論を軸とした「農村社会学」成立前後に着目し、当時農山漁村を対象とした社会学以外も含めた諸研究について再検討を行った。具体的には、農村社会の研究群について悉皆的に再検討し、「農村社会学」確立当時の研究者の関係者への聴取調査を通じて資料蒐集を実施、往時の視点や問題意識を浮き彫りにし、捨象された視点・概念・問題意識等を明らかにすることを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の意義は、有賀喜左衛門・鈴木榮太郎によって確立した日本の「農村社会学」について改めて再検討し、現代の農山漁村の実態を把握し分析を行うための新たな枠組みの提示を試みたことである。従来の「農村社会学」の研究課題･手法を、その前史より再検討し、学問体系確立の中で捨象された課題や分析手法について再評価し、現代農山漁村研究への新たな分析枠組みを提示することを試みた。また、有賀喜左衛門に関する新資料の発見と整理、また「農村社会学」確立期の研究者の元で研究を行った複数の研究者のインタビュー調査も行い、その成果を公表に向けて整理した。そうした資料の蓄積も今後の農村社会学の展開に寄与すると考えている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of our project is to grasp and analyze the reality of the rural and fishing villages in Japan which faces a reformation period. Rural sociology carried an analysis of rural communities in the past, but adaptation by a conventional theories became difficult by a radical change in social structure.
We focuses on the time when the “Ie-Mura theory” had established, and reconsidered about a wide range of studies, including besides the sociology about rural society.
Specifically, we have reconsidered overall about a studies for rural communities, made several interviews with the persons who studied under researchers established rural sociology. And we tried to find out the angle of research in those days, and discover viewpoint, concept and the problem, which passed over by recent rural sociology.

研究分野：社会学

キーワード：農村社会学　村落社会学　学説史　社会調査

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来、日本「農村社会学」は、戦前期に有賀・鈴木を中心として学問的基盤が確立されたとされる（似田貝 1973）。いわゆる「家・村理論」、即ち有賀の「同族団」の理論及び、鈴木の「自然村」の理論が基礎となるこの枠組みは、永年にわたり日本の農村社会研究のバックボーンとなってきた。

ところが現代、農村の社会的環境は激変し、その社会関係も大きく変貌し、従来の分析枠組の適用が困難となっている。熊谷苑子（2004「二十一世紀村落研究の視点」『村落社会研究』39：35-48）が、従来の「農村社会学」の研究には、移動、持続性、俯瞰的視野構造への視点が欠落していたと指摘したように、その欠落を意識したアプローチ、具体的には、世界的な産業システムに位置づけて理解する研究（立川雅史 1994「アメリカ「農業社会学」の展開と視野」『農村生活研究』38(2)：16-21）、持続的生産に着目する研究等（徳野貞雄 2011『生活農業論』）が進みつつある。しかしなお、農山漁村が生産を前提とし、固定化され、切り離された存在として扱う視点の克服は困難となっている。加えて「食」や「環境」など農山漁村を社会構造以外の視点から捉える研究者も増加し、従来の「農村社会学」の理論を再考せざるを得ない状況となっていた。

こうした背景を受け、本研究グループ（本研究の 4 人と牧野修也氏）は 2009 年から、日本「農村社会学」確立期以前を対象に、関連諸分野も含めた農村社会に関する研究業績の再検討を開始した。これらは、「農村社会学」の枠組みからは等閑視されてきたものの、豊かな視点から農山漁村社会の分析を行っており、今日の理論的停滞を打破する契機を包含していると考えたからである。2012 年には、日本社会学会でその成果を報告し、先行研究と大きく異なる視点を打ち出し、従来なおざりにされてきた業績の再検討にこそ、新しい分析枠組みを提示する可能性が内在していることを明らかにした。

2013～2016 年にかけては、科学研究費（基盤 C）を拝受し、「農村社会学」成立のプロセスの分析に加え、有賀・鈴木が基礎を築いた際の認識論・課題へのアプローチ法について解明するために、彼らの研究室の関係者に聴取調査を実施、テキスト資料として公刊を準備中である。2016 年には日本社会学会において、共同報告を行ってきた。

本研究は、上記のように、従来の「農村社会学」の研究課題･手法を、その前史より再検討し、学問体系確立の中で捨象された課題や分析手法について再評価し、現代農山漁村研究への新たな分析枠組みを提示することこそ急務と考え、企画された。

２．研究の目的

本研究は、有賀喜左衛門・鈴木榮太郎によって確立したとされる日本の「農村社会学」の意義を改めて再検討し、現代の農山漁村の実態を把握し分析を行うための新たな枠組みの提示を試みることが目的である。

従来、日本「農村社会学」は、戦前期に有賀・鈴木を中心として学問的基盤が確立されたとされる（似田貝 1973）。いわゆる「家・村理論」、即ち有賀の「同族団」の理論及び、鈴木の「自然村」の理論が基礎となるこの枠組みは、永年にわたり日本の農村社会研究のバックボーンとなってきた。

ところが現代、農村の社会的環境は激変し、その社会関係も大きく変貌し、従来の分析枠組の適用が困難となっている。熊谷（2004）が、従来の「農村社会学」の研究には、移動、

持続性、俯瞰的視野構造への視点が欠落していたと指摘したように、その欠落を意識したアプローチ、具体的には、世界的な産業システムに位置づけて理解する研究（立川 1994）、持続的生産に着目する研究等（徳野 2011）が進みつつある。しかしなお、農山漁村が生産を前提とし、固定化され、切り離された存在として扱う視点の克服は困難となっている。加えて「食」や「環境」など農山漁村を社会構造以外の視点から捉える研究者も増加し、従来の「農村社会学」の理論を再考せざるを得ない状況となっていた。

本研究は、上記のように、従来の「農村社会学」の研究課題･手法を、その前史より再検討し、学問体系確立の中で捨象された課題や分析手法について再評価し、現代農山漁村研究への新たな分析枠組みを提示することこそ急務と考え、行われた。

３．研究の方法

本研究では主として７つの課題を設定して研究を進めた。即ち、①有賀･鈴木が確立したいわゆる日本「農村社会学」の前史、特に戦前～戦後期の部分について隣接諸分野の文献も含めて再検討すること（有賀・鈴木以前の課題の摘出）、②有賀･鈴木の視角の再検討（直接指導を受けた関係者からの聴取調査、当時のモノグラフの現地調査からの再検討、雑誌や新聞等のドキュメント資料の分析を含む）、③「家族社会学」や「都市社会学」も含む社会学全体の動向分析（学知としての社会学そのものの検討）、それらを踏まえて、④戦後、研究としての「農村社会学」の展開（東京大学、東京教育大学、東北大学、九州大学などにおける研究の展開と各研究機関が培った視点等について関係者から聞き取り調査を行う）、⑤有賀喜左衛門邸から発見された新資料の整理・分析と公刊への準備作業、⑥明治以降の農山漁村における社会学的研究の課題と視点を整理し、現代及び今後の農村研究への新たな課題と分析枠組みを提示する、⑦聴取調査資料等のアーカイブ化への準備作業であった。

４．研究成果

具体的な成果については、ウエブ上の「研究成果報告書」に記載した。

研究会は、2017 年度（７回）、2018 年度（８回）、2019 年度（５回）、2020 年度（６回）、2021 年度（６回）実施し、 各自が担当している分野における課題について提示し、ディスカッションを行った。2019 年度には、日本村落研究学会東北地区研究会としてセッションを組んで、報告を行った。

三須田を中心に発見した有賀喜左衛門の新資料については、全員で写真撮影を行い、目録化を進めている。本目録に関しては今後、公開を視野に検討を進めている。

インタビュー資料の収集については、2018 年度に東北大学名誉教授・細谷昂氏に２回、インタビュー調査を実施し、成果を 2020 年度に公表した。また柿崎京一氏のインタビューデータの整理を行い、既に柿崎氏にチェックを依頼している。返送され次第、公表に向けて動き出すこととなる。

本科研プロジェクトは 2021 年度で終了となったものの、研究期間終了後も本研究プロジェクトは継続する予定である。2019 年度後半からは新型コロナウイルスの影響で、インタビュー調査等が出来なくなっていたが、今後も状況が改善次第、インタビュー調査を再開する予定である。また、研究のまとめ及び収集資料の整理・公開を目指して、本グループによる研究活動を継続していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　11件）

１．著者名 三須田善暢	４．巻 145
２．論文標題 翻刻 有賀喜左衛門ドイツ社会学関係ノート	５．発行年 2020年
３．雑誌名 岩手県立大学総合政策学会ワーキングペーパー	６．最初と最後の頁 1-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 三須田善暢	４．巻 147
２．論文標題 第2章　有賀喜左衛門は煙山村調査をどう読んだか――有賀の読書ノートを中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 岩手県立大学総合政策学会ワーキングペーパー	６．最初と最後の頁 19-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 有賀喜左衛門（三須田善暢翻刻）	４．巻 147
２．論文標題 付録　『中村吉治「村落構造の史的分析」批評集』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 岩手県立大学総合政策学会ワーキングペーパー	６．最初と最後の頁 1-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 細谷昂・三須田善暢・矢野晋吾・高田知和・牧野修也・福田恵	４．巻 148
２．論文標題 細谷昂先生に聞く：戦後日本農村社会学者への聞き取り資料	５．発行年 2020年
３．雑誌名 岩手県立大学総合政策学会ワーキングペーパー	６．最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三須田善暢	4．巻 71(3)
2．論文標題 書評 高橋明善著『自然村再考』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 社会学評論	6．最初と最後の頁 508-509
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4057/jsr.71.508	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三須田善暢	4．巻 37
2．論文標題 有賀喜左衛門における欧米研究の摂取について――ドイツ社会学関係のノートを中心に	5．発行年 2021年
3．雑誌名 歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集	6．最初と最後の頁 91-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 福田恵、長坂格	4．巻 55-10
2．論文標題 山間地域における移住者の社会的役割――その継承と生成に着目して	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本の科学者	6．最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福田恵	4．巻 284
2．論文標題 近代山村にみる広狭域のネットワーク構造――森林資源をめぐる動員網と関係網	5．発行年 2021年
3．雑誌名 社会学評論	6．最初と最後の頁 595-614
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4057/jsr.71.595	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三須田善暢・庄司知恵子	4．巻 22
2．論文標題 研究ノート 日記に見る昭和前期石神大屋齋藤家の生産と生活	5．発行年 2020年
3．雑誌名 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集	6．最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三須田善暢	4．巻 26(1)
2．論文標題 書評 斉藤史郎著『昭和日本の家と政治――日本社会学における家理論の形成と展開――』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 村落社会研究ジャーナル	6．最初と最後の頁 38-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.9747/jars.26.1_38	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三須田善暢	4．巻 145
2．論文標題 翻刻　有賀喜左衛門ドイツ社会学関係ノート	5．発行年 2020年
3．雑誌名 岩手県立大学総合政策学会ワーキングペーパー	6．最初と最後の頁 1-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 福田恵	4．巻 35
2．論文標題 近代山村の社会学史的研究――社会結合と森林形成に関する論点と課題	5．発行年 2019年
3．雑誌名 社会学雑誌	6．最初と最後の頁 96-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福田恵	4．巻 63-2
2．論文標題 「山」からみる社会学	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ソシオロジ	6．最初と最後の頁 119-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14959/soshioroji.63.2_119	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三須田善暢	4．巻 なし
2．論文標題 土屋喬雄と石神調査	5．発行年 2017年
3．雑誌名 伊藤守・小泉秀樹・三本松政之・似田貝香門・橋本和孝・長谷部弘・日高昭夫・吉原直樹編『コミュニティ事典』春風社	6．最初と最後の頁 44-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 矢野晋吾
2．発表標題 「日本農村社会学成立期における米国農村社会学の影響――20世紀初頭の米国農業政策とその転換、日本における受容――」
3．学会等名 日本村落研究学会東北地区研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 三須田善暢・庄司知恵子
2．発表標題 日記からみえる昭和前期石神大屋齋藤家の生産と生活：石神調査研究の中間報告（1）
3．学会等名 第67回日本村落研究学会大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 三須田善暢
２．発表標題 有賀喜左衛門における欧米研究者からの摂取について：遺稿類から
３．学会等名 日本村落研究学会東北地区研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 三須田善暢
２．発表標題 有賀喜左衛門における海外研究者の摂取について：遺稿類から
３．学会等名 第23回 常民文化研究講座・国際研究フォーラム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 福田恵
２．発表標題 『資源』を介した人の移動と村落研究の可能性――出稼ぎ・集落移転・農村移住の諸事例から
３．学会等名 日本村落研究学会関西東海地区・中国四国地区合同研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 福田恵
２．発表標題 人の『移動』からみた農山漁村――村落研究の新たな地平を目指して
３．学会等名 日本村落研究学会テーマセッション
４．発表年 2019年

１．発表者名 三須田善暢
２．発表標題 煙山調査に対する有賀喜左衛門の反応：有賀の読書メモから
３．学会等名 2018年度日本村落研究学会東北地区研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 三須田善暢
２．発表標題 有賀喜左衛門は煙山村調査をどう読んだか：有賀の読書ノートを中心に
３．学会等名 第66回日本村落研究学会大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 福田恵
２．発表標題 戦後山村における林業移動と小集落の役割――高知県吾北村の林業グループを中心として
３．学会等名 日本村落研究学会中四国研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 高田知和
２．発表標題 埼玉県八基村と渋沢栄一―1920年代の二度の農村調査から―
３．学会等名 第221回渋沢研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 三須田善暢
２．発表標題 民藝運動と昭和恐慌期の農村社会
３．学会等名 盛岡市立図書館科学談話会12月例会（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 福田　恵	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 233
３．書名 「『家・村』論のあゆみと現在」『よくわかる地域社会学』（山本努編著）	

１．著者名 福田恵編（日本村落研究学会企画）	４．発行年 2020年
２．出版社 農山漁村文化協会	５．総ページ数 368
３．書名 人の移動からみた農山漁村――村落研究の新たな地平（年報村落社会研究56）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三須田　善暢 (MISUDA YOSINOBU) (10412925)	岩手県立大学盛岡短期大学部・その他部局等・准教授 (41201)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	福田　恵 (FUKUDA SATOSHI) (50454468)	広島大学・総合科学研究科・准教授 (15401)	
研究分担者	高田　知和 (TAKADA TOMOKAZU) (70236230)	東京国際大学・人間社会学部・教授 (32402)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関